

母としての女性

一、乳

女性の胎内に嬰兒あかじがやどる時、女性の乳房に乳が出来る。そして生れ出でたみどりこの口にこの乳がそゝがれます。何という神秘でしょうか。

白い温い乳が、何も知らぬ赤子の口から体に吸われて若い生命が内から育つてゆく。

女のみに許されたほまれです。女のみが持ち得る特権です。母そのものが乳となるけれども、乳は子供のものなのです。

母は：：乳に：：乳は：：子供に。ですから母が子供になるのです。

活きた事実です。

空漠な官万言の言葉よりも活きた事実が尊いのです。

女性としての美は花の美です。散つてはかなき美であります。

しかし母としての女性は永遠です。

女性は女性であつて、断じて母ではありません。しかし母は必ず女性です。母であることは女性の最高の光榮であり特権です。

嬰兒が無心に乳にさわっている処、そこは眞の平和と人生の美しいあらゆる生活の摇篮であります。

我等が無意識の世界には、この乳をくわえた日の一分がかくされておるに違いな

い。

乳の日の母は実に我等の全部でありました。幾多の聖者は皆、この嬰兒の世界にかえつたのです。苦惱と荒んだ現実の底に嬰兒の日の一切を見出したのです。そこに純情があり、素直さがあり、温かさ、平和と、報恩があります。

幼き日に、母の乳房の温かさを知らなかつた人の子の一生が如何に暗い涙の多いものであるかを知る時に、子供に仕える母を拝みたい心さへする。

二、子守歌

『ねんねんよ おころりよ

坊やはよい子だ ねんねしな

まだ夜は明けぬ よい夢見つつ

よい子ぞ泣くなよ ねんねんよ……』

母を憶う時、子守歌をおもう。

田園の夕べに素朴な子守歌が、街の夜中に哀調をおびた子守歌が、東洋にも西洋にも、人の子の母の口から子守歌が聞える。

子守歌を聞く時、母の慈愛と、愛の忍従を憶う。

子守歌……それは実に母の慈愛のシンボルであります。

『泣く子よ。母はここにあり、安らかに眠れかし。』

それこそ切々たる慈母の祈りである。泣く子故に悩む親心である。母と子の美しい一生はこの子守歌の延長にすぎぬ。

慈愛をおいてどこに親があらう。

『女は弱し。されど母は強し。』

何故に母が強いのだろう。力は唯、慈愛から生れる。

力とは苦を忍従しのぶことである。

子故に忍ぶ母親を、私はあまりに知りすぎる。

夫が不品行、不身持になつても去り得ないで、愛なき家庭に、痩せ衰えて、涙の忍従を続けるのも子故であつた。

『幾度も婚家をぬけ出でて、実家にかえろうと思つたか知れないが、この子故に辛抱いたしました。』

長い間には若い嫁が、意地悪い姑に虐げられたり、夫の愛なき仕打ちに堪えかねて、一切を棄て、逃げ出そうとする時があるかも知れない。

そこに強い力がひきとめた。子故に……涙の哀史が綴られる。

母よ、私は切言します。あなたが愛子を棄てて、どこに真に生きる世界がある。育ててやつて下さい。忍んで下さい。迷わないで下さい。

子を棄てて、他の男性の愛に走つたり、一時の怒りで、心を鬼にして、義理で動いたりした時に子どもの一生は、どうなるのです。貴方の心に、人間としての純な気持ちが蘇る日に、貴女が棄てた子供の追憶が、あなたを暗くすることはあまりにも明瞭です。

2

早く夫に死に別れて、二十代の若い身空で、子供のために独身を通す婦人がある。多くの男性は、四五十になつても妻が死ねば後づれを持つ、二度結婚するのが悪いと言うのではない。

しかし、二十三十の若い女が夫のわすれがたみである愛子を抱いて、一生独身を通す母には無条件でお礼を申します。人生に於ける美しい事実の一つです。

貴女の美しい愛の忍従は、一生かくれて世の中に表われぬかも知れぬ。しかし、かくれたる捨て石としての貴女の一生は、表われる表われぬということによつて、永遠に価値が左右されるはずがありません。

眞実の生き方は名誉心を棄てた所にある。

あなたが一個の捨て石として皺しわがれた日、そこには、あなたの愛子が、あなた自身の延長として立っている。

三、継母

地上の悲しい事実の一つとして継母と継子のいたましい家庭苦が作られる。

私は継母に同情します。

継子に同情します。

まゝ母が生さぬ仲の子供をいじめ、子供がまま母の仕打ちを呪うという嫌な出来事は、可なりたくさん聞かされもし、見ても来ました。

時と場合によればあなたが継母にならねばならぬこともあるでしょう。あるいは継母を持たねばならぬかも知れませぬ。

それはさげ難き地上の事実であります。

血の続いているものを續いているように、飾ることも出来ねば、そう思うことも出来ませぬ。さればその間を永遠に美しく暮し得ないものでしょうか。私は信じます。

お互の間に深い理解と、愛が働くならば決して悪くばかりなるはずはありません。仮にも縁あつて「はは」と呼び、「子」と呼ぶのです。

真に知ることは愛することです。相手の一切を知りつくし、その立場を理解しつづいた時、そこには『母親なき不幸の子』がふるえているのです。

それに同情し、それを愛してやらねばおれぬ心がわいた時、もうこの問題は解決したのです。

ある地方に講演にまいりました。ある奥様が度々私の所に来て、中学五年になるお子様のことについて色々と言われます。

「子供が信仰に心をむけてくれて嬉しい。」とか、今頃は休暇で帰っていて、今日は講演を聞きに来たとか。ある時は、これが広島市から送った手紙だとか、大変にお子様のことを心配し、「信仰に入れてやらねば、この有難い世界の味を知らせてやらねば、」と時には眼に涙さえ浮べて色々と言われます。

私は初めは実の母子だと思っていました。所がその間は生きぬ仲であつたのです。ある時です。そのお子様が心臓病にかかつて家に寝たり起きたりしていました。奥様はわざわざ私を家庭に招いて、「信仰上不審な点を聞かしてやってくれ。」と云われます。私は心から奥様の心根に感心しつつ、参つてその病む青年と数時間お話をしました。その時です。奥様はわが事のように泣いて喜びつつ語られました。

「先生、私は誠にお恥しいことではありますが、数年前まで、この子があることが、嫌で嫌でまことにつらく当っていました。

その頃の私はまことに鬼でありました。ところがあれを御覧下さい。あの山に見える墓は、私の実の娘の墓ですが、あの娘が亡くなりました。あの娘を失つて悲しくて寂しくてたまらぬ私は遂に今一度あの子に会いたいというのが動機で、如来のみ救ひに気づかしてもらいました。如来のみ光の前に一切をなげ出した時、あゝ私は鬼だつたのです。地獄一定の大罪人だつたのです。私ほどの悪人はなかつたのです。その大悪人が救はれるとは、何という有難いことなのでしょう。それ以来この子に対して誠にすまぬことばかりしていたことに気づかせられてまいりました。

それでせめては、この如来の救済を、この子にも知らせてやつたらと、そればかり思いつづけていました。今日は何とも申しようありません。有難うございます。」とて泣きつつ、過去を物語られたのを聞いている時、私は真の親子の間ですら、これほどまでに純化されていないのもあることを思いつつ、尊い生きた御説法を受けて真に感謝しました。

信仰による懺悔の態度は、悲しい地上の業のもつれをそのままに浄化せられたのです。

継母根性はにくむべき心です。私どもがきらうのは、生きぬ仲という事実でなくて「まます母らしい女」です。

世の中には生みの子に対してすら、まます母らしい女があります。母としてのやさしさも奉仕もなく、高あがりした、慳貪邪見な鬼のような女があります。子供の運命を虐げ、虚栄と、横暴と、高慢との鬼のような心に反省も懺悔もなく、ただ頭から高飛車に孝行を我が子に強いている女があります。それらはたとえ、血は続いていても、真の母ではなくて、まます母らしい女であります。

私はまます母らしい女をすきませぬ。「孝の世界」を破壊する者は、子よりもまず、かかる親なのであります。

四、自覚

あなたが如何につまらぬ女と自ら思つても、あなたの膝にもたれて「母様」とよぶ子供のためには、あなたはかけがないの尊い母なのです。その子のためにあなたの価値は絶対です。

如何なる英雄も、聖者も、それは女が生みました。

無自覚に生んで無自覚に育てることは動物でも致します。私が要求するのは目覚めたる母なのです。

子供のためには三度居所を変えた孟子の母、南朝の大忠臣楠正成の妻としてその子をして父の意志を全うせしめた正行の母、世の名聞栄達に墮落しようとした我子を誠め、三十年愛執をたちきつて面会せず、ついに不朽の大聖者たらしめた、横川の源信和尚の母の如く、目覚めた母の前だけに、目覚めた子供があります。

かくして母は子供に子供たれよと求める前に、母として不断に自分を培わなくてはなりません。

目覚めたる母が、国家社会をよりよく建設する母体であります。ですから我らは、一切の問題の出発点を目覚めたる母に求めます。